俺と生徒はセイムエィジ

神眩千彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と生徒はセイムエィジ

【Ｎコード】
Ｎ５５３５Ｖ

【作者名】
神眩千彰

【あらすじ】
ＵＳＡよりＪＰＮへ一人の男が帰郷する。教員免許を引っ提げて日本政府特別指定区域へ向かうその男――――――１７歳。魅惑の花園を舞台に繰り広げられる学園恋愛物語。１７歳の生徒を教える１７歳の教師。同じ年でも、生徒と教師はやっぱり禁断？！それとも・・・・。笑い、涙、羞恥、嫉妬、なんでもありの青春爆走学園生活が今始まる！――――――先生。この気持ち、わたしに教えてくれますか？

１―０　プロローグ

俺から言わせてもらえば、日本なんて先進国でもなんでもない。
例を私情から挙げるとすると、まず学校という学び舎に”飛び級”という制度が存在しない事だ。あることにはあるが制限が多く、無いにに等しい状態だ。だから優秀な人材が埋もれてしまい、十分に才能を発揮出来ぬまま社会に放たれてしまう。
結果、日本の曖昧な基準値から割り出された「学力」が低下していると騒ぎ立てる。低下の原因が自分たちとも知らず。
次に挙げるとしたら・・・そうだ、これだ。
男女共同参画社会の不成立。
日本は一体いつまでこんなことをしているんだ？未だ僻地に住む民族がやるような男女の固定観念から抜け出すことが出来ていない。
そしてまさか事態が回りに回って、俺に影響を及ぼす事になるとは・・・。
なぜこんな事を急に語りだしたかと言うと、その愚行の産物に俺が身を投じる事になったからだ。

「ぁ～～～～～～、くそぉ～・・・・何でだぁ・・・・・・・」

声を上げながら落胆を表す俺に、女性が話しかけてくる。

「お客様、機内ではお静かにお願い致します」
「あ、Ｓｏｒｒｙ，　ｂｅ　ａｗａｒｅ　ｏｆ　ｓｉｎｃｅ―すみません、以後気をつけます―」

すっかり忘れていた。今は航空機の中だという事を。言うまでもなく話しかけてきた女性は客室乗務員。笑顔でこちらを覗き込む彼

女にこちらも笑顔で応じた。

「ぁ、Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ―ありがとうございます―」

どうして顔を赤らめる。あんたも俺みたいな老け顔が好きなのか？と心中で尋ねてみるものの、それが彼女に聞こえるはずもなく、彼女が去るまで終始笑顔で見送った。

「はぁ・・・」

手に握り締める三枚の書類。そこには英語で『辞令』と書かれていて、内容はこうだ―――

『

神部達樹（かんべたつき）殿。

この度、日本にあります『紅雪（くせつ）女子学園高等学校』への赴任を命じます。

尚学校のある位置は、日本政府の特別指定区域に当たります。

事前に許可は得ていますが、添付資料を理解のうえ慎重に赴くようにしてください。

神部教諭の益々のご活躍を遠い地よりお祈り申し上げます。

ベルサール大学校理事長　サウロ・カルバン　』

何度も読み返したであろう辞令文。それを再び読み返し始めた俺は添付資料？に目を移す。そこには学校の内部案内図が記されていて、職員室や教室の位置が細かく記載されていた。

「そうじゃないんだがなぁ・・・」

悪態を吐きながら添付資料？へ。そこには、紅雪高校についての情報が事細かに記載されていた。

『男女共同参画社会確立の推進に向け、女性専用特別指定区域内に建てられた高校。このことから分かるとおり生徒は全員女子。もちろん特別指定区域内にあるため男性の干渉は皆無である。東京都面積の約２０％を占めている女性専用特別指定区域。区域内の高等学校はこの一校だけで、基本的に区域内の女子中学校からエスカレーター式で進学してきている。教育方針として挙げられているのが社会への適合能力の向上である。中学から高校までの６年間で社会ですぐに使えるまでに育て、高校最期の一年で男性のいる社会へと馴染ませるような教育プログラムを組み立てている。』

・・・冒頭で俺が述べた理由を理解してもらえただろうか。

そう、これから俺は男一人いない世界で肩身の狭い思いをしながら生きていくのだ。

これを憂鬱と言わずに何というのか。

しかも皮肉なことに、俺の教える生徒たちは・・・・

「まだ俺、新米教師だぞ？・・・もっと普通のところでいいだろうに・・・」

フォン、という電子音と共にベルト装着ランプが点灯する。どうやら着陸するようだ。

外を見ると、さながらニューヨークシティのようにビルが多く建ち並んでいるのが見えた。

日本・・・・

「Ｃａｍｅ　ｂａｃｋ．　Ｉｎ　ｍｙ　ｈｏｍｅｔｏｗｎ―帰ってきた。俺の故郷に―」

□■□■

鞄を片手に歩く通学路。いつもと何も変わらない・・・っていうとちょっと変かも。

今日は始業式。いよいよ旅立ちの時が間近の高校３年生になった。

「・・・・・」

見せる相手なんていないけど、実は髪型がいつもに比べてちょっと違う。しかもスカートの丈も少しだけつめてみた。

寮から出る前に自分の姿を確認してみたけど、なんだか少し大人っぽくなった気がした。

（変なトコ・・・ないかな？）

といっても既に鏡が目の前にあるわけではないので直せるはずもなく、歩きながら手鏡で髪型だけを確認する。

（大丈夫・・・だよね、よし！）

わたしは立ち止まる。横断歩道の信号は赤。

始業式が待ち遠しくなんだかソワソワしてしまう。

（早く、早く♪）

と念じていたところで、手鏡を握り締めていたことに気づく。
わたしはそれを鞄の浅いポケットにしまい、信号を確認しようと顔をあげる。
すると
ブワッ・・・と風を巻き起こしながら、目の前を一台の黒塗りリムジンが通った。

（え・・・・・・？）

一瞬、後部座席に見えた横顔。その横顔は女性の横顔のそれとは程遠い様だった。

□■□■

「えー、皆さんにおかれましては、えー、春休みを、えー、有意義に過ごされたかと思います。えー、しかし――――」

校長先生がステージ上で全校生徒へと話をしている。
しているのだが・・・・・・。

「ふふ、神部先生人気者ですね」
「どうですかね、これは・・・」

生徒は全員、ステージ下の隅に控える俺を見ていた。
こら、こっち見ないで校長先生の話聞けって
俺はそんな意味を込めて、校長先生を指差す。
その仕草に生徒たちは顔を見合わせキャッキャする始末。
ぎりっ！

腰の辺りに抓られる痛み

「いっ！痛ぅ～～～～～・・・・・」

「神部先生、人を指差してはいけません」

「おっしゃるとおりです・・・」

先程から俺とやりとりをしているのは、城島若菜（じょうじまわかな）先生。

２３歳と若いが、面倒見の良さそうな付き合いやすいタイプの人だ。

「――――――と。私の話はこれくらいにして、えー、今年度着任されました先生を紹介します」

（いよいよか）

左手でネクタイの裏を押さえながら、結び目をクイっと上げる。

スーツブレザーの両襟を持ち、静かに引っ張り整えて準備万端。

「ご登壇ください」

俺は校長先生に目で頷くと、一歩一歩噛み締めるようにステージへ上がった。

ステージの中央まで来ると生徒たちの方へ向き直り、マイクまであと一歩というところで姿勢良く立ち止まる。

「えー、神部達樹先生です。アメリカ合衆国より遥々おいでくださりました。三年Ａ組の担任で、えー、担当教科は国語です。えー、先生は日本の小学校卒業と同時に渡米され、向こうで優秀な成績を修められたため、この度教師として再び日本へ帰ってこられました。えー、また、本校創立以来初めての男性教師でもあられますので、よく先生に指導していただき一社会人として自立できるよう努力し

てください。・・・では先生」
「はい」
その場で一礼。一歩前に出てマイクへと顔を近づける。
「こんにちは」
俺が声をマイクに通した瞬間、大音量の「こんにちはー！」が返ってくる。
「Ｗｅｌｌ　ｄｏｎｅ―よくできました―」
そういうと、さらに嬉しそうな声が返ってきた。
「初めまして、神部達樹と申します。先程校長先生の紹介にもあったとおり、日本に生まれて小学校６年生まではこちらに住んでいました。とは言っても、私が国語を担当することに驚いた人も多くいるでしょう。ですが渡米後も、私は英語の学習と日本語の学習を欠かしませんでした。故にこの場に国語教師として立っていることが出来るのです。皆さんもこれから多くのことを学んでいくと思いますが、努力を惜しむことなく学校生活を有意義に過ごしていきましょう。私たち教師が全力でサポートします」
俺の言葉に生徒も他の教師も静かになり、体育館に響くのは最早俺の声だけになっていた。
「最後になりますが、私は中学より幾度か飛び級を経験しており日本の大学卒業生よりも若い年齢で教員免許を取得しました」
体育館内の生徒がざわめく。

「ですから年齢は――――――17歳。今年で18です」

・・・・・。

『ええーーーーーーーーーっ！？』

生徒たちの絶叫が体育館を割れんばかりに響き渡る。
当たり前の反応だとは思うが、「えー！見えない！」という声は些か頂けない。

「では、これからもよろしくお願いします」

俺は一歩下がり礼をすると降壇し、未だ絶叫の続く体育館を後にした。
俺が憂鬱であるもう一つの理由。
それは、俺の教える生徒が”同い年”だということだった。

1―1　住めば都？

（本来なら始業式前に挨拶へ来るものだが）
コンコン
堅牢な装飾の施された大きな扉をノックする。

「どうぞ」
「失礼します」

扉の向こうの人物に促され、俺はドアノブに両手を添えながら捻る。外観ほど重量感の無い扉は、礼儀を無視すれば片手で開くほどに軽い。
扉を開くと室内には漆塗りの大きなデスク、そしてそれに向って座っている中年女性の姿があった。

「よく来たね！」
「は、はい」

紅雪高校の理事長、三上啓子（みかみけいこ）。
始業式において、理事長は急用のため出席できなかった。だから本来なら始業式前に挨拶へ来るところを現在へと遅らせたのである。
それにしても、理事長の快活っぷりに思わず呆気を取られてしまった。思っていたより若かったというのもあるが、何より理事長という人は物静かだというイメージがあったからだ。

「君が神部先生で間違いないね？」
「はい、神部達樹と申します。日本のには未だ不慣れで至らぬ点も

多々――――」
「いい、いい、堅苦しいのは抜きでいいよ。君とは他の先生方よりも面識が多くなるはずだから」
「そうですか」

ペースを掴みにくい人だ。ただ、一つだけ言えるのは、数少ない教員生活で見てきたどんな理事長よりも親しみやすいということだ。今少し話しただけでも、その事が感じ取れる。

「始業式では随分人気だったらしいね」
「どうですかね。生徒たちの目付きからすると、何か珍獣を見た時の目をしていたような気も」

俺の苦笑気味の返しに、理事長はくすくす笑う。

「わたしも見たかった」
「ええ、お望みとあればいつでも」
「あはっ・・・だけど悪いね。こちらの我儘で君には肩身の狭い思いをさせてしまう」
「いえ、住めば都という言葉があるくらいです。私一人だけに適用されないはずがありませんよ」

こんな事を言っているが、もちろん世辞だ。

「そうだね。まあ何にせよ――――」

順調に進む他愛のない話が、場の空気を和らげていく。
最初は少なからず緊張していた俺も今では場の雰囲気に溶け込み、自然な立ち振る舞いが出来るまでになった。

「・・・それで神部先生。うちの生徒は正直なところどうなのだろう？」

いよいよ本題と言わんばかりに、理事長の声色が真剣なものとなった。

唐突だが、とても率直な質問だと思う。だからこそ誤魔化すことなど出来ないし、若輩者の自分に評価を依頼してきた理事長の意思を無下にしたくなかった。

「そうですね。まだまだ常識を知らないというのが感じ取れます。現に私が始業式で必要以上に注目を浴びましたから。・・・こう言っては難ですが、そもそも私は日本政府のこの政策に疑問を持っています。果たしてこんな処置で本当に共同参画社会が確立できるのか、と」

「なるほど・・・」

理事長はスーツの内ポケットからメモ帳を取り出し、俺の言葉に合わせてペン先を奔らせる。

「かといって、この学校の存在を否定するわけにもいきませんし・・・私に言えるのはそれくらいです」

「ありがとう、参考にさせてもらうよ」

理事長は俺の言葉を手帳に一通り書き終えると、パタンと閉じ元あった場所に滑り込ませた。

そんなタイミングを見計らって、今度は俺が口を開く。

「そういえば、私の住居ってどこになるんでしょうか？」

とても気になっていた。荷物などを事前に送ってはいるが、「ど

んな所か」という情報が全く入っていなかったからである。
「あれ？聞いてなかったの？君の住む所は――――」
理事長からの衝撃の一言に
「な・・・何ぃーーーーーーーーーーっ！！」
理事長室のみならず空に至るまで、俺の絶叫が木霊した。

□■□■

俺は玄関に向かって廊下を歩いている。
「先生、さ・・・さようならっ！」
「ん、さようなら」
俺が笑顔でそう返すのと同時に、挨拶をしてきた女子生徒はどこかへ駆けて行ってしまった。
帰りの挨拶というのは、すれ違いざまに会釈する程度のものを普通とするが、先程から俺に挨拶に来る生徒たちは行く手を阻むように立って、言葉をつまらせながら頭を下げるのだ。
（初々しいにも程があるな）
「はあ～・・・」
生徒が一通りいなくなったのを確認すると、俺は盛大に溜息をついた。

職員専用の下駄箱に到着したが、どうしても気が進まず靴を取り出そうとする手が止まる。
生徒の初々しさも問題だが、それよりも今は目先の問題だ。つまり、これから住む俺の住居の話。
（いくら教師と言えど、教師である前に俺も一人の男なんだがな・・・）
今更どうこう言ったところで変わるわけでもないし、第一ここは特別指定区域だ。男の安住を求める時点で挫折するのは確定しているのだ。分かっている、分かっているのだが・・・

「せ、先生」
「ん？」

丁度靴を取り出し、地面に置いたところで背後から呼び止められる。
振り返るとそこには一人の女子生徒。恥ずかしそうにモジモジしながらも決意の宿った目で俺を見つめていた。

「どうした？」
「その、お時間・・・よろしいですか？」

その言葉に頷くと、生徒は再び校舎の中へと俺を誘った。

□■□■

キィ・・・バタン――――――
真新しい金属の扉が、俺の背後で閉まる。

「わざわざ屋上に来なければいけなかったか？」
「いえ、そういう訳ではないんですが・・・」

日は傾きかけているが夕日というにはまだ早い、そんな光が彼女の顔を照らす。

「確認したいことがあって・・・」

目を伏せてしばらく黙りこくる生徒だったが、やがて意を決したように顔をあげて俺を見据える。

「わたしの事、覚えてる？」
「・・・・？」

最初何を言っているのか分からず、今度はこちらが沈黙する番となってしまった。
わたしの事、覚えてる？
・・・覚えてる？という語に違和感を感じる。これは、生徒として覚えているか？という意味よりも、それ以上の何かが関係しているように思えたからだ。
だが、それを知る術は今の俺に無い。
だから俺は難しいことを考えることなく、ありのままを伝えることにした。

「ああ、神楽坂真尋（かぐらざかまひろ）。俺のクラスの生徒だ」

事前に送付されたきた資料から、生徒の顔と名前はほぼ一致させて来た。
だから”覚えている”
だが、やはり俺の答えは彼女の求めていたものとは違うらしく、

再び目を伏せてしまった。

「神楽坂。失礼だが、俺とお前は面識があるのか？」

直感で思った事をそのまま伝える。

彼女の「覚えてる？」の意味と、教師と生徒以上の関係を窺わせる崩された口調が瞬間的に結びついたからだ。

俺の言葉に神楽坂はゆっくりと顔をあげる。

「タツキ・・・」

「っ！！」

俺の名前をこんなにも優しく呼ぶ人物はそう多くない。

ということはやっぱり・・・

記憶を隅々まで辿る。きっと彼女がいるはずだ。・・・しかし、どれだけ探しても都合良くは出てこない。幼い頃の記憶というのは儚いものだ。

「無理もないよね・・・小学校以来会ってないもん・・・」

「神楽坂・・・」

「ううん、違うよ。境、境真尋（さかいまひろ）」

その名前を聞いた瞬間、一つの記憶が鮮明に浮かぶ。

空港で父親に手を引かれる俺。でも、なにか大切なものを忘れたような気がして振り返る。そこにいた両親に挟まれている一人の少女。「ぜったいにかえってきてね！」と叫ぶ少女。その子の名前は・・・境――――――

「マヒロ・・・！」

俺は記憶の中の名前にはっとして顔をあげる。
そこにはわずかな面影を残し成長した、マヒロの姿があった。

「気づかなかった・・・全く」
「うん、無理ないよね。苗字も変わっちゃったし、マヒロなんて名前いっぱいいるし」

そう言う彼女の懸命な笑顔に、俺は途轍もない罪悪感を覚えた。
確かにマヒロの言葉に甘えるなら分からなくて当然なのかもしれない。でも俺は、悔しかった。日本での最後の親友であり、俺に日本へ帰ってくる事への思いを築いてくれた人物を忘れてしまっていた事が。
(何度も名前を読み返したのに。何度も示唆してくれたのに・・・くそっ)

「タツキ」
「・・・・・」
「お帰りなさい」

傷ついているはずなのに、それでも俺に屈託のない表情で迎えてくれるマヒロ。
この瞬間自分の中で何か大切なものが、ようやく始まった気がした。

「・・・・・っ」

しかし、再会の喜びすら満足に出来ない自分に気づく。
(俺は教師なんだ・・・すべての生徒に公平さを期さなければならない・・・)
本当は互いの6年間について語り合いたい。食事でもしながら、

ゆっくりと笑いあいながら、同情しあいながら・・・・ただそれだけなんだ・・・！

「・・・ただいま」

その一言でしか、応えることが出来なかった。

「募る話もあるがまた今度にしよう。日が暮れる前に、な」

「うん、そうだね」

俺の素っ気無い言葉に、マヒロはどう感じたのだろうか。表情を窺うがその感情を知ることは出来ない。

流れる沈黙。そしてそのまま、俺たちは屋上を後にし帰路に着いた。

□■□■

「わざわざ送ってくれなくてもいいんだよ？」

わたしの言葉にタツキが一瞬眉をひそめる。

「ああ、だがそうもいかないんだ・・・」

そう言ってタツキはあからさまに落胆して見せた。

「どういう事？」

「時機に分かるさ」

「そっか・・・」

・・・・。
わかってる。タツキは先生、わたしは生徒。
一人の生徒を特別扱いするわけにはいかないんだよね？
わかってる。わかってるけど・・・
（タツキは・・・わたしと会ってどう思ったんだろう？嬉しかったのかな。それとも、もうどうでもいいのかな・・・）
不安が胸中を渦巻く。
少しでも、彼がどう思っているか分かればいいのに。そう思うのは、ダメなことなんだろうか・・・？

「マヒロ」
「えっ、な、何？」

突然名前を呼ばれたので、驚いて声が裏返ってしまった。

「昼休みの食堂などの公の場なら、少し話せるかもな」
「ぁ・・・・・・」
「・・・マヒロ？」
「う、うん！ありがとう」

（そっか、タツキも話したいと思ってくれてるんだ）
そう思うと嬉しかったのと同時に、人を不安にさせないよう気遣ってくれる懐かしいタツキの姿にドキドキした。
懐かしいと言っても、彼の容姿自体にはほとんど面影は見られない。タツキは自分でどう思っているのか知らないけど、彼も十分変わった。なんというか、大人の色気を感じさせるのだ。

「・・・・」

タツキの横顔を盗み見る。
整った顔立ち。顔の位置は見上げるくらい高くなっていて、スーツの上からでも分かる引き締まった体は・・・

「っ／／／」

だめだ、だめだ。どうしても意識してしまう。
これもわたしが長い間、男性と触れ合うことがなかったからなのかな？

「だが、みんなの前で呼び捨てはよせよ？俺とマヒロにはそれぞれ立場があるからな」
「うん、もちろん！」

（タツキ・・・）
わたしの心拍数を上げる魔法の言葉。この気持ちにわたしは既に気づいていた。
きっとこれを・・・・・

□■□■

「え・・・タツキの入居先ってまさか・・・」
目前の建物を見ながら、マヒロは呆然と呟く。
「ああ・・・」
『紅雪第一高等寮』。この建物はそう呼ばれている。

3年生全員が入居している寮で、今は管理人がおらず募集中だそうだ。

・・・まあ、ここまで言えばわかってもらえるだろう。

「今日から・・・俺が管理人だ」

「そう、なんだ」

マヒロを横目で見ると、その頬はほんのり朱に染まっていた。

無理もない、俺だって恥ずかしい。形はどうあれ、「同じ屋根の下で住む」という言葉が当てはまるのには間違いないのだから。

「まあ・・・なんだ。これからも、よろしくな」

「う、うん」

そのまま俺たちは正面玄関まで歩いていき、設けられている機械にカードを差し込む。機械のランプが青色に発光したかと思うと、正面の大きなガラス扉が自動で開いた。

「じゃあ、わたし3階だから」

「ん、じゃあな」

ロビーのサイドに設けられている大きな階段を上っていくマヒロ。その後ろ姿を最後まで見送ると、俺は『管理人室』と書かれたロビーの正面の扉に歩み寄り、施錠部分にカードをかざす。

カチャン

解錠したのを確認すると、俺はゆっくりと扉を開いた。

「おいおい」

室内の広さに俺は目を見張った。

靴をスリッパに履き替え、リビングの真ん中に立つ。隅には俺がアメリカから予め送った荷物がこじんまりと佇んでいた。正直持ち込みすぎたかなと思うほどだったが、どうやら杞憂のようだ。辺りを見回すと幾つもの扉があって、更なる大きさを予感させる。
（たかが新人教師がいい御身分だな、全く）

「あらあら、ご謙遜を」
「・・・っ！」

まるで俺の心を読んだかのような言葉を背後から受け、視線だけをそちらに向ける。
そこには白と黒のゴシック調な服に身を包んだ女性が立っていた。所謂メイド服といったところか。ふんわりとした笑みが俺を背後から捉える。

「いつからそこに？」
「あなた様のカードキーが扉を解錠した時からです」

全く気づかなかった。恐らく内開きの扉故に、その裏にでも隠れていたのだろう。しかし一般人がそこまで自らの気配を消せるものだろうか。

「あんた・・・何者だ？」
「申し遅れました」

そう言って女性はその場で跪く。

「この寮の管理人に仕えさせて頂いております１８禁キャラのドＳメイド、日向暦（ひゅうがこよみ）と申します。以後お見知りおきを、我が主」
「・・・・は？」

自分でも驚くほど間抜けな声が出てしまった。思わず女性に向き直る。

「メイド、だって・・・？」

「はい、ですから何なりとご命令・・・いえ、本来ならば私は命令をする方が好きなのですが、この際ですからその役はお譲り致します。ですから何なりと、我が主」

俺の部屋にメイドが住み着いているなんて初耳である。しかも、先程から妙に余計な語が耳につく。

「メイドって事は・・・あんた、俺の身の回りの世話を？」

「はい」

「この部屋に住み込みで？」

「はい」

「・・・・」

「・・・・」

意気消沈する俺に、にこりと大人っぽい柔らかな笑みを浮かべる。

「はぁ・・・」

「えっちぃのをご所望ですか？」

「違う！」

プライベートゾーンにまで、女性が入ってくるこの始末。

世辞でも『住めば都』などと言ってしまったことを今更後悔し始めた、新学期初日の夜だった。

１―２　その眼光の鋭きこと

「理事長、意図が分かりかねます」
「いやぁ、ごめんごめん」

俺は朝一番、脇目も振らず理事長の元を訪れていた。理由など決まっている。自称『Ｒ１８な女王メイド』・・・何か違う気がするが、つまりは暦（こよみ）について抗議するためだ。

「果たして私――――――俺は、このまま彼女と同居するべきなのですか？」
「それが望ましい。周辺の世話はやってくれるし、何よりわたしは彼女を信頼している」
「・・・理事長、俺はどうやら疲れているようです。あなたの口から”信頼”という言葉が出たような錯覚に陥ってしまいました」
「現にそう言っているよ？」
「・・・・・・」
「・・・・・？」
「はぁ・・・いいでしょう。では今朝の出来事をお話しすることにします」

〜

俺は夢を見ていました。既に内容は覚えてはいませんが、とても幸福な気分になれる夢だったと思います。

ですがその夢がどんどん悪い方へと進んでいくのです。俺は夢の中でもがき苦しみ、やっとの思いで夢から覚めました。
そんな苦しみの心境で目覚めた俺に突きつけられたのは、またしても悪夢でした。

・・・・・。

「ん・・・」

体全体にひどい圧迫感を感じ、口から思わず呻き声が漏れる。

「ふふ・・・可愛い・・・」

思いのほか近くから聞こえた女性の声。その声と目蓋の上に射し込む朝日に促されるように、俺はゆっくり目を開けた。

「・・・・ｗｈａｔ」

寝ぼけ眼の俺の目に飛び込んできたのは、肌が透けるほどに薄い生地のネグリジェに身を包んだ女性の姿。横たわる俺に跨り、その両手は俺の首に添えられていた。

「あら、起きてしまわれましたか。おはようございます、タツキ様」
「・・・・ああっ？！」

驚愕の光景に脳が一瞬で覚醒し、体が飛び起きんばかりに跳ねる。しかし、上から押さえつけられているために逃れられない。

「おいっ、何の冗談だっ！」
「冗談ではありません。これが１８禁キャラと呼ばれる者の務めで

すから」
「何を訳の分からないことをっ・・・早く降り、ろっ」
全身に力を込め抵抗するが、寝起きと言うのもあって彼女はビクともしない。
「あなた様が悪いのですよ?年下なのに、すごい色気なんですもの・・・」
頬を撫でる両手。首、胸、腹、臍とどんどん降下していく。
「お、おいっ、やめろっ！」
「んふふ、知ってるんですよぉ?男性は朝がとっても元気だってこと」
「よせ・・・おいっ、やめろ!やめてくれぇぇぇぇぇーーーーーっ!!!」
〜
「・・・・・」
理事長は赤面しながらも、ごくりと生唾を飲んで俺の話に真剣に耳を傾けてくる。
「理事長、なんでそんな興味津々なんですか・・・」
「えっ!そ、それは・・・あ、あまりに淫らな行いであれば、黙認できないからね」

うんうんと頷きながら、理事長は躊躇いがちな視線を送ってくる。
「それで？・・・ど、どうなったの？」
「急に『朝食が冷めてしまいますから、身支度をお早めに』とか言って部屋を出て行きましたよ」
「そうか、そうか」

理事長は再びうんうん頷きながら、ハッハッハと大げさに笑う。ちなみに顔の赤みはまだ抜け切れていない。

「うん、なら問題ないね」
「正気ですか理事長！？」
「女に二言はない」
「・・・・・・」

理事長なら理解してくれると思ったが、結局話は振り出しに戻ってしまった。

「このままの方が面白いに決まってる」ボソッ
「何か言いました？」
「いやいや、何も。まあ、あまりにも過激になり過ぎるようならそれなりの対応をするよ、それまで辛抱して。」
「はあ・・・善処します・・・」
「ほら、もう少しで朝のＨＲが始まる。初仕事に行った行った」

理事長に背を押されながら部屋を出ると、俺は閉まった扉を一視し３－Ａの教室へと歩き始めた。

□■□■

だんっ

「よし、朝のＳＨＲを始める」

『きゃーーーーーーーー』

俺は教卓の上に名簿を置きそれを叩いた、たかがそれだけで教室内は黄色い声で充満する。

（苦労するな・・・）

本当ならばここで大声を発して場を収めたいところだが、それでは教育にならない。まずは穏やかに警告をし、それでも無理な場合にのみ然るべき処置をするのが肝要だ。そうする事で生徒の自制心を量れ、同時にクラスの結束力を見ることも出来る。

「隣のクラスの迷惑だぞ？あまり騒ぐな」

そう言うと、完全に話し声は無くならなかったが確かに声のボリュームは落ちた。

（ん、自制心はそれなりにあるようだな）

「日直、進行してくれ」

俺の言葉に、再び教室が騒ぎ始める。

そんな中、一人の生徒がその場に立ち上がった。

「みんな、静かにしろ！先生がお困りなのが分からないのか！」

その一言で、教室に静寂が訪れる。

「先生、実は日直がまだ決まっていないのです。ですから先生の方で指名していただきたく思います」

立ち上がった女子生徒は御室千歳（みむろちとせ）。現生徒会長であり学級委員長でもある。成績がずば抜けて優秀で、本校の模範生として君臨している。幼い頃より剣道を続けており、凛とした佇まいがそれを窺わせる。

「わかった。ありがとう、御室」

いえ、と言って御室は着席した。

「よし、日直を決める。御室、君だ」

「えっ！？・・・は、はいっ！」

まさか自分とは思っていなかったのだろう、その佇まいに似合わない素っ頓狂な声が挙がる。自分の声を恥じ、真っ赤になる御室。クスクスと笑う周囲の女子をようやく睨めるくらいの精神状態である。

（ま、仲は良いのかも知れないな）

御室は捲し立てる様に朝礼を済ませていき、最後に俺の話となった。

「欠席は・・・柳瀬（やなせ）と風見原（かざみはら）か」

そう呟いた瞬間

ガラガラガラガラ――――――ピシャンッ！！

不意に教室後部の扉が開いた。

「・・・・・・・」

クラスメイトの視線を受けながら、自らの席に向かう生徒。柳瀬愛美である。腰まである長いツインテールが、歩く柳瀬の後を追う。

「柳瀬、遅刻だが？」

そんな俺の声を無視しさっさと席に座ると、こちらに向かって鋭い視線を向けてくる。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

俺は目を逸らさず真っ向から対峙する。するとやがて柳瀬の方が視線を逸らし、何事も無かったかのように机に突っ伏した。

柳瀬愛美。先ほど日直となった御室と相対する学校一の不良生徒である。話によると、夜な夜な街へ繰り出しては粗暴な振る舞いをし、最近ではレディース同士の争いにも首を突っ込んでいるという話だ。

（噂の真偽は別として。容認できる事態ではないかもな）

俺はＳＨＲの終わりを告げると、そのまま教室を後にした。

□■□■

「先生、隣いいですか？」
「ああ」

昼休み。俺は食堂で二人掛けの席に座っていると、マヒロが声を掛けてきた。周囲から『ずる～い！』などの声が飛び交う。

「大丈夫なのか？俺と飯食って」
「いいの、自分が食べたいと思ったんだからっ」
少しムスッとした声のマヒロ。流石にデリカシーが無かっただろうか？
「それならいいが・・・神楽坂、質問していいか？」
「うん」
「柳瀬って、普段はどういう感じなんだ？」
「アユミちゃん？根はいい子だよ、わたし仲いいし」
「ほう」
丁度いい、少し話を聞いてみよう。
「なんで急に？」
「今日遅刻してきたからな、何か日常生活が絡んでるんじゃないかと思っただけだ」
・・・本当はもっと遠回しに訊こうと思ったが時間が限られている。少々強引だが訊きたいことだけに絞ることにしよう。
「お前は柳瀬の噂について知ってるか？」
「うん」
「あれはどうなんだ？」
「噂は事実だよ。だけど、アユミちゃんにも色々あって今はまだ迷ってるんだと思う」
（色々、か・・・）
生徒についての学校生活については資料で把握できるが、日常生

活や家庭環境などのプライベートな部分はどうしても情報不足だ。
だがマヒロの表情を見れば、柳瀬に対してどれだけ親身になっているかがわかるし、柳瀬を心配しているという事も伝わってくる。

「だから・・・タツキ」
「神部先生だ」
「・・・神部先生。あまり冷たくしないであげて、ね」
「・・・・」

マヒロの瞳に映る俺の顔。映し出されている自分自身の表情を見た瞬間、俺の答えは既に決まっていることに気づいた。

「ああ。救ってみせるさ、必ず」

確信を込めてそう言った。
絶対出来るさ。何たって今の俺の顔は、自信に満ち溢れているのだから。

□■□■

夕焼けに色づいた校舎を振り返る。
他の生徒は既に帰ってしまった後で、校門へ向かうのはあたし一人だった。
・・・・もう、学校に来る意味はない。
周囲からは変人のような目で見られ、教師たちからは不良のレッテルを張られ、あたし自身もそれを自覚している。どうせあたしも、この女の世界に埋もれて夜を徘徊するダメ人間になるんだ。
そんな確定的な将来を覆す気力なんてないし、そんな事に気力を

使うくらいなら”この世界”で生きていく術を身に着けた方がよっぽどいい。

「マヒロ。バイバイ・・・」

この学校で唯一あたしに一人の友人として接してくれた友に、届くはずもない別れの言葉を呟く。それからあたしは前に向き直り、校門へ向かって歩き始めた。

「柳瀬」

「っ」

突然、背中から声を掛けられる。振り返るまでもない。この声は紛れもなくあの男の教師の声だ。そう考えた瞬間、胸の奥から激しい憎悪が湧き上がる。

フィードバックする脳裏に焼き付けられた映像。

男の下種な笑み、真っ赤な宝石のように光るナイフ、『アユミ』と呼ぶ馴れ馴れしい声。

死ね、死ね、死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ねしねしねしねしねしねしねしね!!

「明日は、遅刻するな」

「・・・・・・」

溢れ出しそうな憎悪を、奥歯に力を入れ必死に噛み殺す。そして鉛のように重たい足を引きずるように、ゆっくりと校門へと向かった。

なんとか校門へ辿りつくと、未だあの男の視線があたしに向いているのを確認して肩掛けの鞄を降ろす。そして・・・・

「っ！！」

鞄の持ち手を持って振り回し、校門へと思いっきり叩き付けた！

ばちぃんっ！！・・・・・・どさっ

あたしはそのまま鞄を置き去りにして、その場を去った。

「男なんか・・・・・・死ねばいい」

1―3　インモラル

「・・・・・」

今日、柳瀬は来なかった。今年、つまり二年生の終わり頃から欠席が増えているという報告があるため、然程珍しい事ではないのだろう。だが・・・

（何か引っ掛かる・・・）

今日はどのクラスも国語の時限は無い。だから今日は職員室でゆっくりと考える事が出来るのだ。俺は昨日柳瀬が残していった鞄を見る。他人の所有物を物色する気にもなれなかった俺は、自らのデスクの脇に昨日と変わらぬ状態でそれを置いたままでいた。

「そんなに気になるなら見ちゃえばいいじゃないですか♪」

「見ちゃえばって・・・まるで俺に疚しさがあるみたいに聞こえますが？」

声をかけてきたのは隣の席の城島先生。俺の鞄に向ける視線を好奇心と受け取ったのだろう、無邪気な声に思わず脱力してしまう。

「疚しいじゃないですか～。だから迷っているんでしょう？」

「・・・確かに。相手が異性である事は意識しているつもりですが」

意識というか、人間としてのモラルの問題だろう。ただでさえ人の物を盗み見る事は非常識なのに、ましてその相手が異性となると尚更ではないだろうか？

「う～ん。わたしが言えた義理じゃないんですけど、神部先生は見るべきだと思います」
「え？」
「普段ならぜ～～～～ったい反対なんですけど、今回は善しとします」
「な、なぜ？」
「それは・・・・物語上必要というか何というか、作者的な観点でゴニョゴニョ」
「はい？」
「と・に・か・く！いいんです、上司命令です！見なさい！」

そう言うと、鞄がドカッと俺の目の前に置かれた。
俺は鞄に手をかけてみるが、やはり負い目を感じて見るのを躊躇う。しかし、それを横から送られてくる殺気にも似た視線に促され、渋々鞄の口を開いた。中にあったのは開かれた形跡の無い新品同然の教科書数冊と、それとは裏腹に開かれすぎて接着部分が甘くなっている一冊のノート。
どちらを開けば良いかは一目瞭然。当然ながら俺は草臥れたノートを手に取り、一頁ずつ丁寧に捲っていった。内容はほとんど殴り書きで、このノートをメモ帳感覚で使っていたのが窺える。
（柳瀬にとっても、マヒロは親友なんだな）
何年前の記述かは分からないが、『日付＋マヒロ』という控えが多く見られることから、二人の親密な交友関係が理解できる。
更にページを捲っていく。千切れていた語が繋がっていき、徐々に形を成してきた。内容からするにどうやら夢の話らしい。日付は把握しかねるが同じ悪夢を何度も、それに回を重ねるごとにより鮮明なものとなっている。
『夜。聞こえた小さな悲鳴。いつの間にか扉の前に立っている自分。隙間からのぞく部屋。あか、あか、赤。ベッドに覆いかぶさる背中から生えた黒い翼。振り返るその額に生えた双角。人間の顔をした

化け物。男。化け物は男。男は化け物。こっちを見るな。近寄るな。早く――――――』

――――――死ね。

「・・・・・・」

昨日、柳瀬が俺に向けた鋭い眼差し。それは単なる敵意ではなく、憎悪と恐怖の混ざり合った心に深く根ざす不安の表れだったのだ。

しかし・・・悪夢に魘された程度で、男に対してこれほどの拒否反応を示すだろうか？

「どうですか？神部名探偵」

「いや、悪夢を見ただけで人を恨むことなんてありえるかなと」

「さあ・・・・あ、ちょっと寝てみたらどうですか？いつの間にか事件解決かも」

「俺の知り合いに推理を代わってくれる蝶ネクタイの少年なんかいません」

（とは言ったものの、探偵ごっこじゃないが現場へ赴くのが一番早いか）

人間は記憶に強く残った映像を夢でフィードバックすることがある。そう考えると、柳瀬の過去にこの夢と関連する出来事が起こったという可能性もありえなくない。幸いにも国から発行された一時通行書の期限もわずかに余っている。これならわざわざ申請承認を待たなくてもすぐに動き出せる状態だ。

「城島先生、柳瀬の実家の住所を教えてください」

「現場検証ですね！」

俺の言葉に瞳を輝かせる先生に

「はい。でも先生は絶対連れて行きません」

そう釘を刺した。

□■□■

「ようやく着いたか・・・」

長い道のりだった。特別指定区域を抜けるのは俺にとってまさに拷問。道行く女性たちにガン見され、肉食系から声をかけられ、挙句の果てには「写真いいですか？」と赤の他人と記念撮影。昼休みに学校を出たはずが、結局着いたのは夕方の今頃になってしまった。

「そんなに遠くはないはずなんだが」

俺は住所に記されている家の前に立つと、玄関に掲げられている表札を見る。間違いない、柳瀬の実家だ。しかし中に人が住んでいる様子はなく、その外観は『住居』と言うより『廃墟』という言葉が相応しいだろう。確認のためインターホンを鳴らすが電離切れ、ドアには鍵がかかっていてもちろん開かない。

「無駄足、だったか？」

そんな小さな呟きを漏らす頃、一人の婦人がこちらを見ているのに気づいた。俺は顔に笑みを浮かべて軽い会釈をする。

「どちら様ですか？」
「私、柳瀬愛美さんのクラスを担当させて頂いております、紅雪女子学園高等学校教師の神部と申します」
その言葉に婦人は驚きを露わにする。
「アユミちゃんの！？それに紅雪高校は確か、特別指定区域内のはず・・・」
「疑われるのも無理ありません、ですが今の私には冗談を言う猶予すらありません。どうかご信用いただきたい」
猶予がないというのは大袈裟だろう。だが、事態を出来るだけ早急に解決しなければならないのは確かだ。
「・・・わかりました。ではまずアユミちゃんの近況を聞かせていただけませんか？」
信用を得る点で言えば、それが一番早く効果的な方法だ。
「はい。私も赴任して間もないことから詳しい事はわかりませんが、前年度からの資料によれば今年に入ってから欠席日数が増加傾向にあります」
「・・・・・・」
婦人は俺の言葉に真剣な面持ちで耳を傾けている。
「また最近では特別指定区域内に徘徊するレディースと、何らかの繋がりを持っているとの噂が広がり始めてしまっています」
「そうですか・・・」

婦人の反応を見れば、柳瀬とは幾らか深い関係であることが窺える。だから本来ならもっと柳瀬の元気な姿を報告すべきなのだろう。しかし俺には現実を、大衆心理に侵された見方をありのままに伝えることしか出来なかった。

「仕方ありませんよ。アユミちゃんは幼い頃から残酷なことばかりを目にしてきましたから・・・」

「・・・親族の方、ですね」

「叔母です、アユミちゃんの父親は私の兄です」

この人なら知っているだろうか。謎の悪夢の真実を・・・

「お兄様は今こちらに？」

俺は目前の廃墟を指さすが、婦人は首を横に振る。

「兄は今、刑務所で服役中です」

――――――夜。聞こえた小さな悲鳴。

「でも当然なのです。取り返しのつかないことをしてしまいましたから・・・」

――――――あか、あか、赤。

鮮明に思い出されるノートに並べられた文字。彼女はまだ冒頭の言葉しか述べていないにも関わらず、俺の中では結論に達した心境でいた。

「ここに来る前、私は柳瀬さんの書かれた一冊のノートを読みました。そこには柳瀬さんが見たと思われる夢の内容が書き記されてい

て、幼い少女が覗いた赤色で満ちた部屋に一体の悪魔がいたというものでした」

俺は婦人をしっかりと見据えながら話す。婦人は明らかに動揺していて、俺が柳瀬の担任である事以上を悟った様子だった。

「この夢について、何か心当たりはありますか？」

そう言い終えるのと同時

ピリリリリリ――――ピリリリリリリ――――

スーツの内ポケットにある携帯電話が鳴り響く。

「失礼」

そう言うと俺は婦人から数歩離れたところで音源を取り出し、通話ボタンを押した。

「はい、神部です」

「もしもし、わたしです。あなたの妻です」

「はぁ・・・・何の用だ？」

「酷い言われようです。用無しに電話をしてはいけないと誰が決めたのですか？」

名乗られなくても、口調と声で分かる。暦だ。

「暗黙の了解だ！・・・・で、用は？」

「妻同然の人物に対してその態度はなんですか、犯しますよ？」

「くっ・・・・話を聞かせてくださいませんかっ？」

「ふふ、よろしい」

とんだ茶番である。

「先程、管理人室に神楽坂様がお見えになりました」

「神楽坂が？」

腕時計で時間を確認すると、いつの間にか生徒の下校時間を過ぎていた。

「随分お急ぎのようでしたので落ち着くよう促し、話を詳しくお伺いしたところ――――――」

内容はこうだ。

柳瀬の携帯からマヒロに連絡があった。しかしかけてきたのは全く知らない女性で、その背後では争っている音が聞こえたという。

『あんたの友達もうすぐ死んじゃうから、一言だけ挨拶させてあげる』女性はそういったらしい。本来なら警察に通報するべきだが場所は特定できないし、何より親友の危機に警察を介入させてしまうと、被害者である彼女にも影響を及ぼしかねない。そんな思いから俺を頼ってきたのだという。

「それで、暦はなんて言ったんだ？」

「『承知しました。早急に連絡しますので、神楽坂様は部屋で待機しているように』と」

暦はとても落ち着いている。まるで何かに確信を置いているかのように穏やかで、その言動一つ一つがどれも冷静だった。だからいくら軽口を言うような彼女であっても、このことに関しては心の底から感謝することができた。

「ありがとう。すぐに向かう」

「ええ、お気を付けて」

俺は素早く終話ボタンを押すと、柳瀬の叔母を名乗る婦人に向き直った。

「申し訳ありません、用事が出来てしまいました」
「そうですか・・・・緊急ですから仕方ないですよね」
「お察しいただき感謝します。では」

婦人に背中を向け、走り出そうとする。

「あのっ！！」

それを背後からかけられた声に制止され、俺は振り返った。

「アユミちゃんを、よろしくお願いします」

深々と下げられる頭。俺はその姿に頷き一礼すると再び向き直り、待ち人の元へと走り出した。

1―3　インモラル（後書き）

はぅ・・・次の更新日は1ヶ月後になります＾＾；
ご迷惑おおかけしますが、今後ともよろしくです。

１―４　父の存在

もう、どうでも良かった。
殴られた痛さは生きてる実感ではなく、体を未だ持っているという屈辱で。
口に広がる鉄の味は生きてる実感ではなく、血液が未だに温かいという虚しさでしかなかった。

――――――あたしの世界はあの時にもう、壊れていた

～

「お父さん？お母さん？」

朝起きたら二人ともいなかった。いつもならお母さんがいてくれるはずなのになんでだろう？
色々な部屋に入っては呼びかけるが返事は無い。
（きっと出かけちゃったんだ・・・あたしも連れてって欲しかったなぁ）
いつもより広く感じる家に、ぐぅー・・・・とあたしのお腹が鳴る。

「お腹空いたよ、お母さん・・・」

あたしはノソノソと自分の部屋に戻り、先程まで寝ていたベッドに入り目を瞑る。

（こうしていれば、もうすぐお母さんが起こしにくるんだ）

・・・・・・。

「んぅ・・・・・」

眩しい光に目を覚ます。その光は月光で、外は既に夜になっていた。

「え・・・もう夜？」

こんなに眠るのは初めてだったし、何より真っ暗な家の中に一人だけなんて経験したことがなかった。

友達はみんな平気だって言ってたから、こんな事を言うのはカッコ悪いけど・・・・

「怖いよ・・・」

つい弱音を吐いてしまう。すると、そんな恐怖を更に煽るような事が起こる。

「いゃぁぁぁ・・・・・・・・・」

「えっ！？・・・な、何？」

小さいけど確かに聞こえた、女の人が叫ぶ声。

耳を塞ぎたかった、目を瞑りたかった。

・・・でもそんなことをしたら次に叫ぶのは自分のような気がしてならなくて、耳から離れない悲鳴をそのままにゆっくりとベッド

を降りる。
（逃げなきゃ）
足が自然と部屋の扉へと動き出す。
近くにはおばさんの家がある。そこまで頑張ってこの事を知らせればきっと・・・
「・・・・・・」
廊下に出た。でも先程聞こえた悲鳴はもう聞こえず、それどころかあたし一人しかいないほど静かだった。
あたしは恐怖に震えた膝を手でさすりながら、左右に広がる廊下を交互に見る。
（どっちに行けば早いんだろう・・・）
でも、そう考えている間にも”何か”が自分に近づいてきてるんじゃないかと思うと、もう悩んでる余裕はなかった。
ゆっくり、ゆっくり、玄関へと向っているはずの廊下を歩く。
――――――と、さしかかろうとする部屋の扉にわずかな隙間が開いていた。
『絶対に見ちゃ行けない』
頭では分かっていた。もしかしたら体も分かっていたのかもしれない。それでもガクガクと震える全身で、扉の隙間を覗いた。
「ひっ・・・」
”知らない部屋”だった。とても赤くて、１０円玉を握り締めた時のような匂いがする。気持ち悪くて吐きそうだけど、目を離すことが出来ない。固まる全身をよそに、目だけで真っ赤な部屋を隅々まで見る。
そこに・・・・いた。
赤色の”何か”に顔をうずめる黒い生き物。むくむく動いていた

ソレは、急にピタッと動きを止めたかと思うとゆっくりとこっちを向く。

「・・・・ぁ、ぁぁ・・・・」
「・・・あゆみ」
「っ！！」

その言葉にまるで何かの魔法を解かれたかのように、固まっていた体が廊下へと弾き出された。
それと同時にあたしは走る！今までには無いすごい速さで、流れる景色に目もくれず、走る方を一心に見つめながら。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

目の前に見える玄関の扉。
ドアノブに手を掛け、走る勢いを殺さないよう
開いた――――そして、走った――――

〜

「柳瀬！やなせあゆみーーーーーっ！！」
「っ！！」

焦点が一気に収束した。いつの間にか視界は地面と同じ高さで、口からは真っ赤な鉄を吐く。
（何が・・・）
周囲を取り囲んでいる女たちが、ある一点を見つめている。
その視線の先には

「なん、で・・・・」
「はぁ・・・はぁ・・・柳瀬、帰るぞ」

あの男教師がいた。
大きく肩で息をし、額から伝う汗を拭きながら一歩一歩あたしに近づいてくる。
やめて欲しかった。
（男は嫌い、近寄らないで・・・！）
男は嫌だった。でもそれ以上に、自分のせいで他人が傷つくのはもっと嫌だった。
あの教師はどう見てもフラフラ、こいつらにやられるに決まってる。
だからこそ、あたしから離れて欲しかった。
（来ないで・・・）
そんなあたしの願いも虚しく、男教師はどんどんと近づいてくる。

「な・・・なんで男が！？」

ヘッドの女は明らかに動揺していた。

「おいっ、何とか言え！」
「・・・・・」

聞こえてるのかそうでないのか、男教師はまったく反応を示さずゆっくりと歩み寄ってくるだけ。

「ちっ・・・・おい」

ヘッドはあたしを囲んでいた女たちに目で合図すると、今度は全

員で男を取り囲んだ。
そして
「おらっ！」
全員が思い思いに男を殴りつける。
周囲には肉を打つ生々しい音が鳴り響いた。
数で言うと２０人は殴っているだろう。
――――――だが
「なんだこいつ・・・凄く硬い・・・」
男はビクともせず、前進を阻む事が出来ない。
そんな中、ヘッドの女が男の前に立ち塞がった。その手には錆付いた鉄の棒。
「死ねっ！」
そんな声と共に振りかぶった女の手が、躊躇いなく振り下ろされる。
ボクッという強打の音。凶器は頭に命中していた。
頭は垂れ下がり、誰もが割れたと思っただろう・・・それでも
「とんだ蛙だな。自分のいる場所どころか、自分が蛙であることすら知らない」
男の声が静まり返った周囲に響きわたる。
垂れた顔を上げると、頭から血を流しつつも意思の宿った力強い目がそこにあった。

「そんな霞掛かったゴールしか見えないお前に――――――」

次の瞬間

男は女の手から凶器を絡め取ると、先程女がやったようにそれを頭上に振り下ろした！

・・・・・・・・・

「目前のゴールに手を伸ばす俺は、止められない」

寸前で止められた金属棒に女は気絶し、そのまま膝から崩れ落ちた。

それを見ていた他の奴らも自分たちのヘッドがやられたのを知り、我先にと逃げ帰っていく。

「・・・・・。」

「・・・・・。」

ガラン、という金属を地面に投げ捨てる音が響く。

「立てるか？」

あたしは男の差し出す手を無視し、自分の足に無理やり力を入れて立ち上がる。

「・・・男が嫌いか？」

「・・・・・・・。」

聞く耳なんて持たない。あたしの事なんて誰も理解出来ないし、理解して欲しいとも思わない。

「無理もない。父親が人殺しなんだからな」
「っ！！」

この男・・・今、何て言った？

「大好きだった父親が、大好きだった母親を殺した。壊れてこそ正常だ」
「お前ぇっ！！」

男の言葉に全身の血液がグツグツと沸騰したような感覚に、あたしはいつの間にか男に殴りかかっていた。
胸には何かを抉られたような激痛と、それを取り除かれた喪失感が渦巻く。
それでも襲い掛かる全てのものに抗い、体が動く限りひたすら男を殴り続けた。

「お前にあたしの何が分かる！？」

拳を打つ！

「男なんか死ね！」

拳を打つ

「男なんか、裏切り者だ・・・」

拳を、打つ

「仲が良さそうなフリをして・・・なんで」

こぶしを、うつ

「あの優しさはつくりものだったの・・・？」

こぶしを・・・うつ

「教えてよ・・・・・・お父さん・・・・」

こぶし、を――――――――――

「訊けばいいだろ」

「え・・・・」

男を殴りつけていた拳は、いつの間にかその大きな掌に手首を掴まれていた。

「父親は死んだわけじゃない。だったら訊きたいこと全部、訊けばいいだろ」

・・・！

そっか・・・ようやくわかった。

あたしが、お父さんを殺そうとしてただけなんだ・・・。

だけどトラウマを装って、男を嫌いになったり、文字に書いて憎しみを残そうとしたり。それは本当の自分が必死に抵抗していた証で・・・。

そう理解した瞬間、胸の奥からたくさん何かが込み上げてくる。

お父さん・・・お父さん、お父さん、お父さん、お父さんお父さんお父さん！！

「ぁぁ・・・ぁ・・・」

地面にポタポタと出来る染みがジワ〜っと滲む。
でもそれだけじゃ足りない。この吐き気をもよおすほどの感情をどうすれば、どうすれば――――――

「・・・・・・。」
「・・・・・・ぇ」

体全体に感じる適度な圧迫感。そこにあるという確かな温もり。手を回せばそれを受け止めてくれる、しっかりとした重量感。汗臭くてどこか懐かしいこの匂い。
・・・ここでなら・・・ここで、なら

「・・・・・・・。」
「っっっ・・・・・・ぁ・・・・・・ぅあああああああああああああぁぁぁぁぁーーーーーーー・・・・・」

□■□■

「・・・ねえ」
「ん？」

俺の背中に遠慮がちに負ぶさる柳瀬は、これまた遠慮がちに口を開く。

「なんで知ってるの？」
「なんの話だ？」
「・・・お父さんの話」

まだ「お父さん」という語には抵抗があるようで、語調に僅かな恥じらいが感じられる。

「柳瀬が倒れてるときに、『お父さ～ん、怖いよ～』って・・・ぐあっ」

「冗談嫌い」

「ギブギブ」

おぶられているのを言いことに、気に食わないことがあると首を絞めてくる始末。

遠慮してるんだかどうだか・・・

「お前が置いていった鞄に入ってたノートを見たんだ」

「・・・・っ」

「その後、真相を知るために柳瀬の家に行って叔母さんに会って来た」

「・・・み、見たの？」

「ああ」

俺の返事に柳瀬はふるふると震え始めた。

「柳瀬？」

次の瞬間――――――

俺の胴体に柳瀬の足が巻き付き、物凄い力で締め上げる！

「お、おい、柳瀬、痛いんだが！？」

「忘れろ！わ～す～れ～ろ～～～～！！」

ぐぎゅうううう

「よせ、柳瀬、このまま普通に寮に帰りたいだろ！？だったらやめろ」

「なんで見た！？」

「なんでって・・・・お前が心配だったからだ」

「ぇ・・・・・」

柳瀬は小さく声を漏らすと、足の力をゆっくりと弛緩した。

「・・・・・。」

「分かってくれ――――」

俺が背後を振り返ろうとすると

「こっち向くな！」

「ぐあっ」

小さく鋭い拳が俺の頬を打ち抜く。

「どうしたんだ一体？」

「な、なんでもない・・・なんでも」

ぽふっ、と再び俺の背に体重があずけられる。

心無しか先程よりも背中に感じる体温は熱く、鼓動も早いようだ。

「柳瀬お前、心臓――――」

「それより！・・・帰ったら、あたしの鞄返せ」

「あ、ああ」

それから寮に着くまで、柳瀬は口を開こうとしなかった。

～

「あゆみちゃん！」

寮の前で待っていたマヒロが、俺の背から降りた柳瀬に抱きつく。

「マヒロ・・・」

「怪我してるよ？」

「いつものことだから、大丈夫」

「心配したんだから・・・本当に・・・」

「・・・ごめん」

そう言って、柳瀬は抱きついてきたマヒロに腕を回す。

「・・・・・。」

高圧的な態度を取られている俺に、今の柳瀬はとても新鮮に写った。

・・・・・。

「・・・ところで」

しばらくの沈黙の後、マヒロが口を開く。

「”神部先生”には何もされなかった？」

・・・ん？

「神部先生？・・・へぇ、神部っていうんだ。名前」

「”神部達樹”には何もされなかった？」

「・・・うん」

なぜだろうか。マヒロの言葉に刺があるような気がする。

「そう・・・」

マヒロは名残惜しそうにゆっくりと柳瀬から離れると、こちらにゆらりと笑顔で向き直る。

「タツキ、聞きたいことがあるんだけどいいよね♪」

やはりおかしい。

じりじりと距離を詰めてくるマヒロには有無を言わさぬ迫力が備わっていた。

「タツキ、管理人室にいたあの女の人、誰かな♪」

・・・概ね把握した。

つまり、俺が暦を連れ込んでいると誤解しているのだろう。

「誤解だ。あいつは『暦』。随分前から管理人室に住み着いている――――」

「ホントだ、暦さんに教えてもらった通りの言い訳してる♪」

「な・・・」

まさか・・・あいつ

「マヒロ、待て、本当だ。これは暦の罠だ」
「そう・・・だったらなんで後ずさる必要があるのかな♪」
「マヒロが迫ってくるからに決まってる」

後ろめたい事なんて無いはずなんだが・・・

「タツキ。・・・覚悟、出来てるよね？」

背筋が凍るほどの視線に、俺は

「マヒロ、すまん！」

脱兎の如く逃げ出した。

「あ、待ちなさい！」

追ってくるマヒロ。小さくなっていく柳瀬。
明日は学校、まだ新学期は始まったばかりだ――――――。

「名前、神部達樹か・・・・・・・・・・・・・・顔が、熱い／／／」

1―5　この気持ちはなんだろう

「ふぁ・・・・んん」

噛み殺そうとした欠伸が、俺の顎を超える力で放たれる。

「今日、こんな調子で大丈夫か？」

俺は目尻に溜まった涙を拭いながら、寝不足を原因とする頭痛に頭を悩ませていた。

・・・こうなったのも、全てコヨミが悪い。結局あの後マヒロの執念深さに負けた俺が降参すると、数時間前まで管理人室でこんこんと説教を受け続け、気が付けば雄鶏が鳴いていたのだった。

（ん・・・・あの長い説教・・・将来が心配だ）

そんなくだらない事を考えていた俺を

「か、神部！」

後ろからの声が呼び止める。

「ん？」

振り返ると、そこには

自分から呼びかけたにもかかわらず、伏し目がちにゆっくりと歩いてくる柳瀬の姿があった。

「おはよう、柳瀬」

「お・・・おは、よぅ・・・・」

受け答えはするが全然目を合わせようとしない。

「お前がこんな朝早くから登校とは・・・更生したか？」

「ちっ、違う！あ、あたしは、鞄を取りに行くだけ・・・これからどうするかは、それから決める」

「ほう・・・・」

「な、何」

「顔には”学校が楽しみでしようがありません”って書いてあるけどな」

「なっ・・・・！」

柳瀬の顔が赤くなったのを確認し、俺は走り出す。

「ほら、朝のラジオ体操の代わりに鬼ごっこしようぜ。もちろん、顔が真っ赤な柳瀬が鬼な」

「ちょっと、勝手に・・・・・ああっもうっ！待てぇぇぇーーーーーー！」

～

「――――――という現代訳となる」

一時限目の授業を自らの受け持つクラスで行なっていた俺は、平静を装いながらも何とか意識を保てているという危険な状態にあった。

早朝から体を動かせたことで幾らか安心していたのだが・・・

「では次の文・・・御室」
「はい！」
「の、後ろの金子、読んでくれ」

くすくすと起きる笑いをすかさず御室が睨みつける。
こうした軽いフットワークで進めて行けばいざという時も・・・

「・・・っ」

ぐらっ、と視界が歪み、体が傾いていくのがわかる。
（だめだ・・・！）
俺が必死に黒板の縁を掴んだことで、体はぐらついた程度で収まった。
（倒れるわけには、いかないな・・・）
スラスラと朗読されていく教科書。そんな流暢な声に注意を払っていた俺はいつの間にか目を瞑り、だんだん声が遠のいていったところまでは覚えている――――――

□■□■

（全然わからない・・・）
学校自体あまり来てなかったからこういう状況になるのも無理ないけど、正直ショック・・・。
古文なんてまるで外国語を見るような感覚で、完全にお手上げ。
それに先ほどから時々こちらを見る神部の鋭い目つき。あれは完全に理解していないのがお見通しという視線だろう。
（あたし・・・カッコ悪い）

せめて神部の授業くらい普通に理解できるくらいになりたいな・・・

「っ／／／」

あたし何を考えてるんだ！？昨日からおかしいぞ？？

「次の文・・・御室」

どきん

自分の名前でもないのに心臓が収縮する。

「の、後ろの金子、読んでくれ」

周囲からはクスクスと含み笑いが聞こえた気もするが、あたしの耳の中は神部が「柳瀬」と呼ぶ声で一杯になっていた。

（あわわわっ！）

自分でもよく理解できないが、真っ赤になってしまっているであろう顔を隠すために机に突っ伏す。

（・・・ん？）

今、机に突っ伏そうとした瞬間、微かだけど違和感を感じた。とはいっても一瞬の出来事だったため何に対して感じたか詳しくは分からない。ただ、神部が黒板にもたれかかってるように見えたような・・・・

微かな違和感から生まれた一点の不安。

その不安に、あたしは顔をあげる。

どさっ・・・

そこに、神部の姿はなかった。

「神部っ！」

あたしは床に伏している神部に駆け寄る。

普段なら自分の言動が他の女子に恐れられていることを理解しているから、こんな大声を出したり目立つような行動は絶対にしない。それでもこのような行動をしてしまうあたしは、明らかに冷静じゃなかった。

「神部、しっかりして・・・！」

体を揺するが神部は眉間にシワを寄せたまま目を開く気配はない。頭の片隅では昨日の出来事がよぎる。レディースのヘッドが振り下ろした鉄材、あれは間違いなく神部の頭に命中していた。

（もしかして・・・あたしの、せい？）

「先生！・・・柳瀬、先生を医務室まで連れていく。肩を貸してくれ」

「！」

後から駆け寄ってきた御室の声が、あたしの落ち込みかけた気持ちを呼び戻す。

「・・・ん」

危なかった。あのまま独りだったら確実に自分の殻に閉じこもるところだった。

あたしは神部の左腕を自分の肩に回す。そして御室の「せーのっ」という掛け声と共に立ち上がった。

（神部・・・）

〜

「・・・・・。」
「・・・・・。」

医務室の中。担当の先生が出ていった後に残されたあたしと御室は無言だった。
別にあたしは御室を嫌っているわけではない。でも周りから見ればあたしが劣等、御室が優等。大衆心理とは怖いもので、当事者の心さえも犯してしまう。

「柳瀬」
「何？」
「お前、変わったな」

突然の言葉に少し驚く。

「・・・どうしてそう思うの？」
「あんなに必死な柳瀬は初めてだったしな・・・それに、今日は授業中寝てなかっただろ。どういう心境の変化かな、と気になっていたんだ」

よく見ている。きっとあたし以外にもクラスメイトの様子をつぶさに観察していて、そういった観察力が人を惹きつけ人をまとめる力なんだろう。御室を素直に尊敬したくなった瞬間だった。

「神部の、おかげなんだ・・・」
「先生の？」
「うん。それにこうなった原因もあたしかもしれない・・・」
あたしは昨日の出来事を大まかに説明した。
「もしかしたら、その時に頭を・・・」
「そうか・・・・」
御室の一言を最後に再び二人で黙り込んでしまう。
・・・・・。
「私はこれから授業に出ようと思う。柳瀬はどうする？」
「あたしは・・・・・」
視線が自然と神部のほうを向く。
「・・・・残る」
「そうか。では、頼んだぞ」
「ん」
あたしの返事に微笑を浮かべると、御室はそのまま部屋から出て行った。
（・・・気を遣われた）
本来なら生徒会長として授業欠席は黙認できないはず。それにも関わらずそうしてくれた御室に、少なからず好意を抱いたのだった。
（・・・・。）
視線の先には未だ苦しそうな顔で眠る神部。
あたしは神部の寝るベットの横にある椅子に浅く腰掛けた。
なんとかしてあげたい、そう思ってはいても何もできないのが凄

く悔しい。

「どうすればいいの・・・もう」

ぼふっ、と神部を覆う掛け布団に顔を埋める。

鼻の中を消毒液と神部特有の匂いが混ざりあったものが充満した。

（昨日と同じ神部の匂いだ）

「ふふっ」

他の人には見せられない、なんて思いながらも顔を離すことができない。

（すごく安心する匂い・・・）

このまま目を瞑れば、眠れるほどに。

目を、瞑れ、ば・・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

暗い場所。その中にあたしの姿だけが浮かび上がる。

・・・・暗闇のむこう。あたしの他にもう一人スポットライトを浴びる人がいる。

誰だろう。身なりは見たことがあるけど、顔に影がかかっていて表情がわからない。

別に歩いていない。でもその人を見つめているだけで距離が縮まっていく。

手の届く距離。あたしの見つめる人物がこちらに向き直る。

相変わらず顔はわからないけど、その人はあたしの頭に手を置くとゆっくりと撫で始めた。

”ごめんね”

なんで謝るのか分からない。

”そして、ありがとう”

なんでお礼を言うのか分からない。

”じゃあね”

なんで行っちゃうのか・・・・・分からない！！

あたしは遠のいていく後ろ姿を目掛けて走った。

地面を蹴っている実感はない。近づいている実感もない。

それでも走った。

・・・気づいてた、あの人が誰なのか。

だからあたしは、ここで置いて行かれる訳にはいかない！

――――――待って、お父さん！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・っ！」

・・・夢だった。

視界には真っ白な景色が広がっていて、頬をなでるキメ細かな布の感触や嗅覚で感じる消毒液の臭いがそれを物語る。

ただ一つを除いて――――――

「なんだ柳瀬、起きたのか」

頭を往来する圧迫感。それは先程の夢同様、頭を撫でられている感覚だった。

「っ／／／」

あたしはあまりの恥ずかしさに慌てて飛び退く！

腰掛けていた椅子が音を立てて転がるが、そんなの知ったことではない。

「そ、それはこっちの台詞！」

思わず大きな声で叫んでしまった。

「・・・なんだ柳瀬、泣いてるのか？」

「え・・・」

目尻を拭うと、確かに指が涙で濡れる。

「違う。少し悪い夢を見ただけ。・・・別に、神部のために泣いたわけじゃない！」

「そうか」

神部は目を伏せて微笑んだ。

「なんにせよ、ありがとな。」

「あ、あたしは・・・」

神部の言葉に反発しようとして思い留まった。
（何やってるんだろ・・・こんなことをするために付き添ってた訳じゃないのに）
あたしは静かに深呼吸する。
（言わなきゃ。神部に謝らなきゃ）

「柳瀬？」
「神部！・・・その、ごめんなさい！！」
頭を思いっきり下げる。
「どうした急に」
「あたしのせいで、こんなんなっちゃって・・・」
正直言って今まで人に謝ったことは数えるくらいしかない。
しかも帰ってくる返事はどれも決まって『許さない』という内容だった。
一種のトラウマみたいなものなんだろう、そのせいで人に謝らなくなったというのもある。
だからもし、今回も同じような返答だとしたらあたしはもう・・・・

「必要ない」
「え？」
今までに聞いたことのない返事だった。
「謝罪というのは、謝罪される方に対する自分の行動を否定することだ。確かに必要なときもあるが、果たしてそれは今か？」

違う。馬鹿なあたしでも解る。あたしが伝えたいのは、あたしを守るために神部が身を挺してくれた事に対する――――――

「感謝、じゃないか？」

「！」

そうだ。あたしがしなければいけない、いや”したい”のは・・・・

「ありが、とう」

「ああ。またいつでも助けてやる」

優しく微笑む神部の言葉に、あたしは何か温かな気持ちにさせられた。

・・・・・。

「それにな」

「？」

「今日倒れたのは、お前のせいじゃないんだ」

あたしのせいじゃない？

「だって、頭を鉄で殴られて・・・・」

「ただの寝不足なんだ」

ただの・・・・寝不足・・・・？

あたしの頭の中には、『あたしの、せい？』と先ほど鬱になりかけた自分の映像が繰り返し流れていた。

「だから気にする・・・・ぐあっ！」

神部が言葉を言い終える前に、あたしの拳がその顎を捉える。

「・・・・・。」

「柳瀬？」

あたしは冷静だった。

だって、人の心を弄ぶ奴の顔面を殴れるんだから♪

「死ね♪」

あたしはそう言い残して医務室を後にした。

ガラガラガラ・・・・・ピシャリ

（何やってたんだろあたしは）

まるで何かの魔法もとい呪いが解けたように、あたしは落ち着いていた。

そもそもあたしはそんな饒舌な奴じゃなかった。神部を特別視しすぎるあまり普段のあたしを忘れてしまっていたんだ。

（そっか・・・これからは普段のあたしで接することにしよう）

そう悟った、不思議な登校決意の日だった。

1－6　武士

「先生、部活の顧問やりませんか？」

突然の相談だった。

「顧問？」

「はい、きっと先生が顧問をやってくれるとなると生徒たちも一層奮い立つと思うんです！」

「はあ」

城島先生は握りこぶしを作りながら、俺に対して力説する。

・・・・・。

「・・・大体わかりました。つまり今日の放課後は部活動を見学して欲しい、ということですね？」

「ですです」

「構いませんが、俺が突然行っても良いんですか？」

「もちろんです！むしろ、それが狙いなんですから」

「？」

『では、授業へ行ってきます』と言い残すと、城島先生は足取り軽やかに去って行った。

部活見学か・・・・・・

「嫌な予感がする」

〜

『きゃあああああああああ！！！』

「わかった。わかったから集中しろ」

予感的中。

案の定、回る全ての部活が俺の登場で集中力を欠くこととなった。

「・・・おいおい、そこの弓道部員。隣の奴の的掠めてるぞ」

そんな有様である。

（大体、あの人はどこへ行ったんだ・・・？）

そもそも、部活を見て回るように言ってきたのは他でもない城島先生なのだ。それなのに５番目くらいに行ったソフトボール部の見学が終わると・・・

――――――ちょっと、準備がありますので

と言って、俺に回る部活の順番をメモに残したままどこかへ行ってしまった。

（第一印象とは全く別人だ・・・）

「先生も、射られてみますか？」

一人で回想していた俺に弓道部員の主将らしき人物が弓矢を差し出す。

一応、今まで回った部活でもデモンストレーションをしている事から、俺は素直にそれを受け取った。

「やったことがないんだ。教えてくれるか？」
「はいっ！喜んで／／／」
張り切って返事をした主将に、俺は姿勢から打ち方までを小一時間習った。
・・・・・・。
「第一射場、神部達樹」
アナウンスと共に精神統一のために閉じていた目を、開く。
袴姿ではなくスーツで矢を射るというシュールな光景だが、精神統一を終えた俺に迷いは一切なかった。
正座の状態からゆっくりと立ち上がり、射場へ進んで半身の構えを取る。
睨み付けるのは遠方に小さく写る丸い的。
「・・・・・・。」
矢を番えて軽く弦を引くと、弓はギシギシと撓りながら俺の力に応える。
「すぅ・・・ふぅ・・・」
深呼吸の後、矢の軌道を予測しながら剣先を標準に合わせて弓を張詰めた。
ミシミシ・・・・ッ
そして――――

「南無八幡」

放つ！

シューーーという風を切る音と共に、的をめがけて飛んでいく矢。

描くのは正確な直線！

ドスッ！

矢は、的の中心に命中した。

ワァァァァァァ！！！

先ほどまでの静けさが嘘のように思えるほどの大きな歓声が上がる。

「ふぅ・・・」

強靭な精神力が必要だろうと思ってはいたが、この疲労感はその予想を上回るものだった。

まぁ、一度も射たことのない俺にとってこの結果はいささか出来過ぎな気もするが・・・・

「先生、お見事でした／／／」

「ありがとう」

弓道部主将は駆け寄ってくると、期待の眼差しをもって俺を見上げてくる。

「なんだ？」

「お願いします！弓道部の顧問になってください！！」

頭を思い切り下げられてしまった。

「あー・・・なんだ。一応まだ他の部活を回る予定がある、だから今すぐ返事は出来ないんだ、すまん」

「い、いえ！是非、弓道部に！」

「考えておく」

・・・とは言ったものの

俺は本当にどこかの部活の顧問になるのだろうか。

「ところで先生。矢を放つとき、何か呟いていませんでした？」

「南無八幡だ。平家物語で那須与一が扇を射る時に呟いた言葉だ。覚えておくと良い」

「私もやります！！」

「そ、そうか」

”ちょっとやってみたかった”の好奇心を原動力としたものなんだが・・・・

・・・・・。

「・・・・・・はぁ」

第一体育館に到着した俺は、思わず溜息をついてしまった。

「準備ってこのことですか・・・」

ゴム毬がダムダムと音を立てる中、俺はメモ帳に目を移す。

”バスケットボール部”

「この部の顧問になりたいなら、私を超えていってください！」

・・・知らん。

ユニフォーム姿の城島先生は意気揚々と言うが、俺にとっては、ただただどうしようもなく面倒くさいだけだった。

「俺、一言も『なりたい』なんて言ってないですが」

「つ、次の部に行きたくば、私を超えていってください！！」

「”次の部に行く”という繋がりは、このメモ帳一枚ですが？」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

木っ端微塵。

だが、そんな俺の素っ気無い一言に城島先生はウルウルと目に涙を浮かべ始める。

「・・・一回だけですよ？」

「はい！」

・・・どうも俺は他人に甘いようだ。最近つくづくそう思うようになってきた。

「で、どうすれば？」

「フリースローで勝負です！」

・・・・・。

結局。

一本目を俺が入れて、城島先生が外し終了となった。

「何がしたかったんだ・・・」

そんな俺の独り言は鳶張りの床の音でノイズになる。

勝負に勝ちはしたものの、それがなぜか罪悪感として心に残ってしまったのもあり、継続して部活を回ることにした。

（せっかくの機会だ）

そして今向かっているのは武闘場。予定なら剣道部が練習しているはず。

バシン！バシン！

竹刀のぶつかり合う音。

俺は靴下を脱いで畳に上がると、目の前の扉をそっと開けて一礼した。

「やぁーっ！！」「はぁっ！！！」

バシ、バシン！

部屋の中心では防具を身に付けた二人が、各々思い思いに竹刀を振るっていた。

試合をやっている二人以外はどうやら俺の入室に気づいたようだ。

目前で行われている試合よりも注目されてしまう。

”ちゃんと試合を見ろ”そんな思いを込めて竹刀を構えている二人を指さす。

――――――と

ピピーーーーー！！

主審が笛を鳴らし、試合が終わった。二人は竹刀を収めると向かい合って礼をし、中心から離れていく。
最初から観ることは出来なかったが、とても激しい試合だった。打ち筋や気迫は男性の試合に負けずとも劣らない、そんな印象を受ける。

「ふぅ・・・・・」

正直、面の下にはどんな顔があるのか興味があった。あれほどの試合を見せられれば、どうしても男勝りな顔が浮かんでしまうからだ。
だが、面を取って息をついているのは・・・

「御室・・・」

凛とした表情で遠くを見やる彼女の姿だった。

「・・・・・・。」

普段の様子から想像できないほどの猛々しさ。自分の教える生徒の新しい一面を見ることが出来るのは、教職員としてとても喜ばしい事だ。

「・・・・・っ！！」

俺の生暖かな視線に気づいたのだろう。御室と正面から目が合った。
何か恥ずかしかったのだろうか、顔を真っ赤に染める御室。
それが発端になったか、他の部員が俺の周囲に集まり始める。

「先生！見学ですか？」
「ああ、部活の顧問になる事を薦められてな」
「じゃ、じゃあ、剣道部の顧問って可能性も・・・」
「無い事は無いな」

いつも言った後に気づくのだが、自分は余計な事まで喋ってしまう癖があるようだ。
『なんとなく』と答えていればそれまでのものを、『顧問になるかも』などと言うからダメなのかもしれない。今度から気を付ける事にしよう・・・

「先生は剣道やった事あるんですか？」
「『剣道』なんて綺麗なものじゃないが、剣の指南を少しだけ」

ピク、と離れたところで座る御室が反応する。

「強いんですか？」
「さあな。専ら父との手合いだったから分らないな」

『父としかやった事が無い』というのもそう判断できる要因だが、それよりも『あの人が強過ぎた』という方が大きいかもしれない。俺はあの人から離れる最後の最後まで本気を出させることが出来なかった。自分でもある程度努力したつもりでいたが、結局それはあの人の足元にしか及ばなかったという証拠だろう。あの人の。父の背中は、とても大きかった。

「先生」

静かな声が場内に響く。声のする方に向き直ると、そこには先ほどまで鎮座していた御室がいつの間にか俺の目の前に竹刀を横向き

に差し出していた。
「お手合わせ願います」
デモなら断る理由は無い。だが、俺は――――――
「わかった・・・と言いたいところだが」
やりたくなかった。
俺が教えられたのは精錬された『剣道』ではない、醜悪に満ちた『人の殺し方』だ。そんな汚い物で彼女たちを汚すのは御免だ。
「俺の剣は、こんな清い場所では到底見せられない下手物だ。だから――――――」
「構いません」
「・・・御室」

ここまで言ってやめろという方が無理な話なのか、御室の闘志には既に火が点いてしまったようだ。屈強な眼差しがそれを物語っている。
（余計な事は言わないと、先程誓ったばかりなのだが・・・）
俺は差し出された竹刀を握る。
それを確認すると、御室は防具を身に付け場内の中心に鎮座した。
「先生、防具は・・・？」
「面だけで良い」
心配そうな部員を尻目に俺は面だけを被ると、中心で待つ御室と対峙して座った。

「怪我しますよ」
「警告はしたはずだ」

互いにゆっくりと立ち上がり、それぞれが構えを取る。中段に構える御室。それに対して俺は――――――

「本気、ですか？」
「ああ、打ち込んで来い」

左手を重力にまかせ、右手に握る竹刀の剣先を少し持ち上げる程度の構え。
漫画のように『隙が無い』などという展開にはならない、なぜなら素人から見ても玄人から見ても隙だらけだからだ。
ただし、対戦者は一つの迷いを抱く事になる。
それは『隙があり過ぎる』という事。どこからでも攻められる、だがそれ故にどこから攻めて良いのか分からない。
迷う。
だから隙があるのに動けない。

「・・・・・っ」
「・・・・・。」

だが、このまま黙っている御室ではない。強張っていた肩から力が抜けたかと思うと、竹刀を素早く振り上げる！

「やぁっ！！」

鋭い振り下ろし！

「遅い」

しかし、振り下ろされる竹刀よりも早い速度で俺の体は御室の脇腹付近に入り込む。

「しまっ・・・・」

バシンッ

御室の胴に俺の一太刀が入る。

だが、片手打ち及び体勢不十分のために審判から『一本』の声は上がらなかった。

・・・そもそも俺の剣は『一本』なんて声をもらってはいけない。

いや、もらえるはずがない。

互いに再び距離を取って向かい合う。

「まだやるか？」

「答えるまでも、ありませんっ！！」

勢いの良い踏み込みと同時に、今度は斜め上から斬撃が降り注ぐ。

バシンッバシンッバシンッ

三度に及ぶ振り下ろし。

だが次は避ける事なく、全て竹刀で受け止めた。

「軽い！」

「くっ・・・」

竹の擦れる音と共に勢い良く弾き返す！

御室はそのまま数歩後退し、体勢を立て直した。

「御室、見れば解るとおり俺はお前から一本を取れない。だからお前が俺を倒すか、お前が降参するしかない。」
「はい」
「やれるのか？」
「やってみせます」

御室の殺気がかった返事とともに、俺たちは再度剣を交える。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・。
どれくらい経っただろうか。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」
「・・・審判」

俺は審判に呼びかけるが、審判も苦しそうな表情で首を横に振るばかり。

「御室。これ以上はお前の体に障るぞ」
「ま・・・はぁ、はぁ、まだです！」

膝が笑っているのか満足に構える事すら出来ていない。

「御室・・・」
「せ、先生！」

その時、審判が俺の近くまで駆け寄って来た。

（もう、見ていられません。次の先生の一太刀を一本にします。で

すから・・・・・）
（・・・・・・・・助かる）
再び御室を見据える。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」
せめて最後だけでも・・・・
俺は竹刀の柄を両手で握る。
「いくぞっ」
この試合初めて、俺が動いた！
「はあっ」
「くっ！！」
胴を狙う軌道で振るった竹刀。御室はそれを防ごうと竹刀で対応する。
「ふっ！！」
しかしそれはフェイク
手首を返して急速に竹刀を上昇！そして――――
バシンッ
「面！！」
頭上まで昇った竹刀が、御室の面を鋭く捉えた！

「一本！」

今の一撃を浴びて崩れ落ちそうになる御室。俺は竹刀を捨ててその体を抱きかかえる。

「おい、しっかりしろ」

応答しないのを確認しその場に横たわらせると、俺は御室の面と防具を外した。

首に手を当てると、異常なまでに体温が上昇しており全身が真っ赤になっているのが分かる。

「熱が籠もっている中に長時間いたからだろう。誰か医務室から冷却シートと水を汲んだ桶、あとタオルを持ってきてくれ」

「はい！」

「自販機まで行ってミネラルウォーターを」

俺は一人の部員に財布を手渡す。

「手が開いてる奴は、場内の４隅で扇風機を最大速度で回してくれ」

扇風機は壁に当てるように向けろ、と指示し、手元には頼んでおいた団扇が手渡される。

「無茶しすぎだ」

原因は俺、だろうな。

そう思うと、苦しそうに呼吸を乱す御室の姿に罪悪感を覚える。

（生徒をこうなるまで放置するとは・・・教師失格だ）

しかし今はそんな事を考えている場合ではない。今は目先の事。教師のプライドよりも大切にしなければいけないものを守ることだ。

（このままここに寝かせて置くのは良くないな）

頼んだものが揃い次第別の場所へ移すことにしよう、そう決意した。

１―７　尽力の善悪

――――涼しい。
目の前に広がる草原に柔らかな風が吹き抜ける。
照りつける日差しは少し暑いけど、熱くなった肌を風が撫でる。
優しい風・・・。まるで、私を気遣ってくれているようだ。
――――このまま身を委ねられたら、どんなに幸せだろうか。
そんな私の願いが通じたのか、空を見上げると太陽に薄い雲がかかり始めた。
肌に感じていた熱さが薄れ、日光すらも和らいだ。
――――どうしてこんなにも、此処は私に優しいのだろうか

「御室」

――――え？
空から聞こえた声。晴天を仰いだ私は、そのまま光に包まれた――
――――――――――――

□■□■

「ん・・・んぅ」
「御室」
眉間をしかめる御室の姿はもうすぐ目を覚ます合図だろう。

俺は先程から何度呼んだか分からないほどの彼女の名を呼ぶ。

「・・・・ん、ぁ」

目蓋がゆっくりと持ち上がる。

「御室」

「神部、先生・・・？」

御室の顔を見れば解る。何がどうなったか理解出来ていないという顔だ。

「俺と試合をしたのは覚えているな？」

「はい・・・・」

虚ろな返事。

と、思ったが、御室は何か重大なことに気づいたのか、勢い良く上体を起こす。

「まさか私は・・・・またやってしまったのか・・・？」

「・・・『また』かは知らないが、俺の面打ちを受けて気絶したんだ」

「そう、ですか」

ホッとしているように見える御室に対して俺が首を傾げると、何かを取り繕うように言い訳をしながら再び横になった。

「すみません。ご迷惑を掛けてしまって」

御室は本当に申し訳なさそうな顔で俺に謝罪する。

「別にいい。俺にも非があるからな」
「そう言っていただけると幸いです」
「そうか。ならもう少し寝ろ、明日も学校だからな」
「はい・・・・」

――――――――――――――――――――。

「って！何故寝ようとしてるんだ私はっ！！」

瞑られていた目をクワッと開きながら上体を起こす。

「調子悪いからだろ？」
「そうじゃなくっ！ここ、学校の医務室ですよね！？」
「ああ」
「でしたら家に帰らなければ！今何時ですか！？」
「子供は寝てる時間だ」
「なん、ですと・・・」

なんですと、って
ベッドの上でワタワタしている御室を見ていると、無性に笑いが込み上げてきた。

「ふ」
「な、ななな、なぜ笑うのです！？」
「いや、御室は本当にイレギュラーに弱いなと思ってな。はは」
「だからって、笑うこと無いじゃないですかぁ・・・」

いつも完璧に見える彼女が慌てふためいてる様子は実に微笑まし

い。
・・・だが、これ以上いじると本気で泣き出しそうだな。
「それはともかく、御室の両親には俺から連絡しておいた。安心しろ」
「そう、ですか。ありがとうございます」
俺に感謝を述べたのと同時に、御室は再び横たわる。
「先生はどうされるのですか？」
「決まっている。お前の傍にいるだけだ」
がばっ
「やっぱり帰ります」
「いいから寝てろ、お前の体力は今底を尽いている。これ以上動くとどうなるか俺にも分らない」
御室の両肩に手を置いて、ゆっくりと上半身を倒していく。
「っ」
「あぁ、女性の体に触れるのは無神経だったか？」
ベッドに横たわり赤くなってる御室を見てそう察した。
「いえ、ありがとう、ございます・・・／／／」
そう言いながら自分の顔を隠そうと、掛け布団を顔半分まで引っ張る御室。
やはり、異性と同じ部屋は居心地が悪いのだろうか。

「腹は減ってないか？」
「今のところは」
「喉は？」
「・・・少し」

俺は頷くと、席を立って医務室の出入り口に向かう。

「先生！」
「ん？」
「あの・・・・」
「すぐ戻る」
「・・・はぃ」

消え入りそうな声を聞いた俺はそのまま医務室から出た。

～

「先生のお父さんはどのような方なのですか？」

時刻は日付を跨ごうとしている頃、なかなか寝付けないでいた御室がおもむろに口を開く。

「・・・聴きたいか？」

コクリと頷く御室。

それを横目で見ながら、俺は静かに語りだした。

「・・・父は偉大だった」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

自衛官だった父は何事にも厳しく当たり、常に完璧を目指す人だった。
ただ目指すだけでなく、言った事は必ず成し遂げる。そんな父の背中は大きかった。
・・・俺が小学3年生の頃。それは唐突に起こる。

『いつも仕事ばっかり・・・少しは家族と過ごすことを考えたらどうなの！？』

当時俺が母と呼んでいた人は父と正反対の性格をしていて、”どうして二人は結婚したんだろう”と幼いながら考えてしまうくらい不釣合いな二人だった。
彼女の言った言葉は、本人からすると”いつもの”痴話喧嘩程度に考えていたのだろう。
だがそれは『家族』という形を撃ち殺す、引き金となってしまった・・・。
翌日。
父は職場で前々から持ち掛けられていた転属依頼を承諾し帰ってきた。
転属先はアメリカ。

この頃日本とアメリカの関係は悪化の一途を辿っており、双方の軍がその起因となっていた。
そこで両国合意の上で、互いの隊員を数名相手国に派遣し合同演習。ひいては友好関係再確立に繋げればという考えから企画されたものだ。
『そのような重責を担えるのは彼しかいない』
そうして選ばれたのが父だったのである。

そこからは早い。
すぐさま離婚手続きが始まり、母は俺の親権を獲得すべく乗り出すが叶わず。結局俺は父と渡米する事になったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そして俺は渡米の後、米軍への残留が確定になった父に剣を教えてもらった。その結果がアレだ」
相手の視覚に入り込み急所を打つ。正々堂々を重んじる剣道にとっては決して相容れない剣である。

「・・・・」
神妙な面持ちで話しに耳を傾けていた御室は、俺から視線を外そうとしない。
「どうした？」
「・・・先生、お願いしたい事があります」

ゆっくりと上体を起こす姿は何かを決心したように静かで・・・

「私と真剣に――――――」

とても、不気味だった。

～

「考え事ですか？」

「ん？・・・あぁ、いや、何でもない」

「・・・・・」

夕食時、テーブルを挟んだ向かいの席で食事を取っていた暦が首を傾げる。

俺がぼーっとしている事に気づいたのだろう、柄にも無くはぐらかすが返ってくるのはジト目だけだ。

「・・・暦、食いにくい」

「家族に隠し事をするような人のご飯は、そうなって当然です」

「家族って言うな、家族って」

・・・そうは言ったものの、無意識のうちに罪悪感を感じているのか今日の夕食はどことなく味気ないように思える。

「無理に訊こうとは思いませんが、お辛いなら存分に頼ってくださ

い。そのためのわたしですから」
「暦・・・」
「お風呂沸かしてあります。冷めないうちにどうぞ」
「ん、ありがとう」

今日の暦は・・・何と言うか淑女だ。俺との間に一線を引き、尚且つすぐに手を差し伸べてもらえそうな立ち位置。
（どういった心境の変化なんだ？）
別に変化したのは悪い事では無い。むしろ今の暦の方が好感を持てるのが事実である。

「もう少し、様子を見て見るか」

・・・とは言ったものの、とてもじゃないがそちらに気を回している余裕はない。
御室の言ったあの言葉。

『・・・先生、お願いしたい事があります』

『私と真剣に――――――』

ガチャ・・・

俺は自室の窓を開け、冷たい風を浴びる。

「ふぅ・・・」

春になったとはいえ、まだ夜の気温は少し肌寒い。

「御室・・・・俺には、お前が何を考えているのか分らない」

俺の弱音に似た声に、雲で霞んだ月がほくそ笑んだ気がした。

――――――私と真剣に、殺し合いをしてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5535v/

俺と生徒はセイムエィジ

2011年11月30日10時45分発行